



United Nations
Educational, Scientific and
Cultural Organization

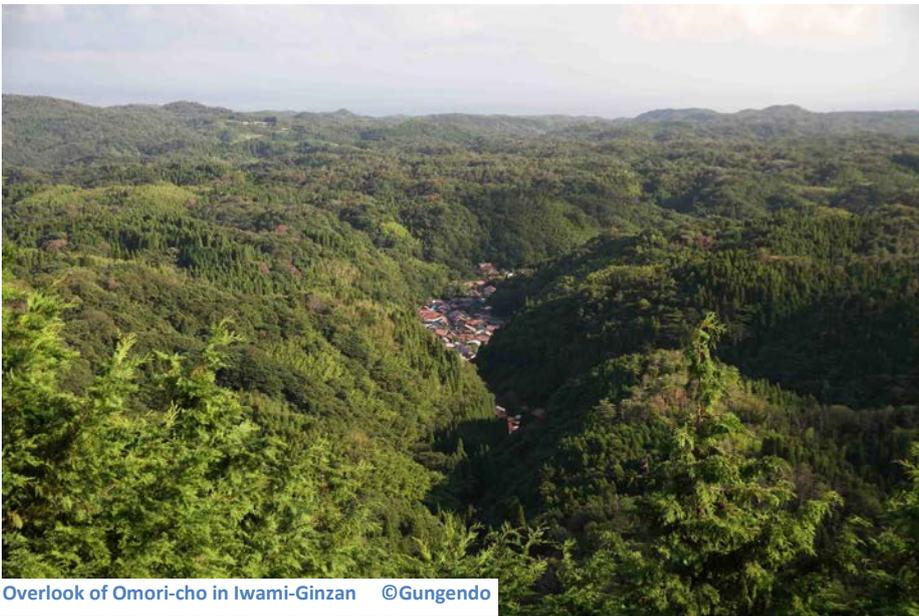


UNESCO Global Action Programme on
Education for Sustainable Development

Success Stories

日本: (小さな) 村中みんな

By キャシー・ノーラン、齋藤珠里、マリー・ド・スーザ



Overlook of Omori-cho in Iwami-Ginzan ©Gungendo

日本は、20 世紀に工業化、都市化、グローバル化のプロセスに成功したことを背景に、世界で最も裕福かつ近代的な国のひとつにまで成長した。ところが今では、21 世紀がもたらした各種の課題に直面し、これまでとは異なる価値観に根ざした繁栄を達成しようと、別の道を模索しつつあり、その過程で、自らのルーツや過去の価値観を再発見するようになっている。

2008 年の金融危機や 2011 年の壊滅的な東日本大震災など、近年はさまざまな災厄に見舞われ、日本人、特に若い世代が、物質的な成功の意味や、暮らしの質、将来のあり方に疑問を抱いている。そうした中、地域ぐるみの行動や持続可能性がカギとなってきた。

こうした概念はまさにタイムリーなものだ。「持続可能な開発のための教育 (ESD) に関するグローバル・アクション・プログラム」を実施するためのユネスコのロードマップにおいても、こうした概念は不可欠な要素であり、それは決して偶然ではない。「グローバル・アクション・プログラム」は、持続可能な開発のための不可欠な原動力として市民社会の果たす役割を重視しているのだ。

この持続可能性を求める動きの最先端となっているのが、人口わずか 400 人の過疎の集落であった大森町だ。大森町は、本州の南西に位置し日本海に面した島根県にあり、伝統的な技法と資材を使った古い木造の建物が当時のまま保存されている点を評価され 2007 年にユネスコ世界文化遺産に登録された石見銀山エリアの一角を占めている。



Street in Omori-cho ©Gungendo

1923年に銀山が休山されて以降、ゆっくりと衰退してきた大森町だが、今では、特に東日本大震災後に多くの若者が移り住み、活気を取り戻しつつある。

「新しくやってきた私たちは、震災を機に人生を見直すことになりました。幸せになるために本当に必要なのは何なのかという疑問を感じるようになっていたのです」と言う三浦類(29歳)は、2011年に東京から大森町に移り住み、創造性あふれる現地の企業で働いている。「探していたものを大森町で見つけました。それは、お金にとらわれない生き方です」

この展開は三浦にとっても予想もしないものだった。帰国子女で東京外国語大学卒の三浦は、外務省の仕事がしたいと考えていた。ところが、石見銀山生活文化研究所の創設者兼会長の松場大吉と出会い、彼をメンターと仰ぐようになった。同研究所は、大森町に本社を置く会社で、伝統的な建材を使って古民家を再生したり、自然素材の衣類や食品などの商品を作っている。

大学時代に松場の講演を聞いた三浦は「町の再生に夢を託している様子に突き動かされた」と言う。それに三浦はちょうど、松場の取組みに貢献できるスキルを持ち合わせていた。子供時代、南アフリカでシュタイナー学園に通った経験があったからだ。「有機農業や家畜の世話をすることも、カリキュラムに含まれていました。あの時期に自然と触れ合えたことを心から感謝しています。今は、休みの日に海でタコをとるのが楽しみです」。三浦はまた、大森町で知り合った新しい友人との時間も楽しんでいる。「東京で小さなアパートに住んでいたころは、隣にどういう人が住んでいるかさえほとんど知らなかった。でも大森町では、知らない人も挨拶してくれる」。週日は松場の経営する会社で広報の仕事を担当している。

三浦の上司である松場は、大森町で呉服屋を営む両親の元に生まれ、名古屋の大学に進むため町を離れた。妻の登美は家計を助けるためにパッチワークの内職をしていたが、大都会での生活に「閉塞



Gungendo Shop ©Gungendo

感」を感じた夫妻は、35年前、まだ幼かった娘を連れて大吉の故郷に戻り、持続可能性を体現するパイオニアとなった。



Louis Miura ©Gungendo

「当時の大森町は、町の歴史の中でもどん底の時代でした」と登美は振り返る。「ほとんどの住宅が打ち捨てられ、空き家となっていました」。仕事に就けるチャンスなど皆無で、大吉の両親は息子一家に町にとどまることを勧めなかった。「でも、田舎の暮らしが価値あるものとなる時代がきつとくる、という予感と、捨てられてしまうものを役立てたいという夢があり、手作りの暖かさを伝えるオリジナル商品を思いついたのです。まずは、余った布でパッチワークの小物を作ることから始めました」。これが東京のギフトショーで反響を呼ぶことになる。「私たちの作ったものは、昔から受け継がれてきた精神的価値を伝え、都会人の心を捉えたんだと思います」大手企業からの取引の依頼を断った松場夫妻は、経験がなかったにもかかわらず、資金を借り入れ、ほかでもない大森町に会社を設立した。現在、同社の製品は、「群言堂」のブランド名で、日本国内の25以上の店舗のほか、オンライン・ショップでも販売されている。従業員数は、大吉と登美の2人だったのが、今では150人にまで増え、そのうち50人が大森町で働いている。地元産の素材の値上がりを反映したにもかかわらず、群言堂の布地や衣類などの商品は、もっと安価に輸入される国外産に対して優位を保ってきた。



Tomi Matsuba ©Gungendo

「3.11以降、若い人たちの意識が変わったと感じます」と登美は言う。「すべてを失った人たちの目の当たりにして、『生きるために何が必要か』について考え直し、本当の意味での幸せの尺度にもっと敏

感になったのだと思います。つまり、少しでも安く、お得感だけを求めていた時代から、伝統に育まれ、暮らしに文化的な豊かさをもたらすようなものを選ぶようになったのです。そんなニーズに私たちのコンセプトが合致したのだと思います」

夫妻は次に、そのコンセプトの下、ほかにもいくつかのプロジェクトを発足させた。2人はこれまでに、大森町で7軒の古民家を再生させている。2人が住む自宅は1789年に建てられた侍屋敷で、あまりにも傷みがひどかったため、江戸時代の様式のまま再生させるのに7年もかかった。「改築のために使った建材のほとんどは、廃校になった校舎や壊れた家屋の廃材です。中には、道で拾ったものもあります」と登美は振り返る。

2人のコンセプトを大森町の人たちに伝えることもとても重要だったと登美は言う。「地元の女性たちに自然の美しさや田舎暮らしのすばらしさを再発見してもらうために、講演やシンポジウムを開催しました。最初は、『自分たちが行く場所ではない』と地元の女性は遠巻きに眺めていましたが、足を運ぶ女性が徐々に増えていきました。女性の意識の変化の現われだと思えます」。

石見銀山一帯は、ユネスコ世界遺産に登録されたことで、一躍脚光を浴び、多くの観光客が訪れるようになった。「この一帯では、銀山が近代化の波に取り残されたからこそ、独自の景観が残されているのです」と登美は強調する。「幸せと経済的成長は

必ずしも連動していないことの象徴です。これこそがまさに、大森町の発信できるメッセージとなっています」

もちろん、いくらかの成長は必要であり望ましくもある。三浦類は、大森町でもっとインフラを充実させればよいのではないかと指摘する。「今は、観光客が日帰りに来て、レンタル自転車でざっと見て回って帰ってゆく、という状況です。宿泊施設も少なく、値も少々張ります。今後は、安いゲストハウスをもっと提供し、一晩でも泊まってもらって町の人たちとの交流の場を生み出すことが、大森町を持続的発展に導くと思います」

同じように、登美も、今後は大森町が近代的な企業を誘致し多様性を高める必要があると考えている。「黒か白だけの町では魅力的ではありません。多彩



Matsuba couple shares a dinner table with clients ©Gungendo

になれれば理想的です。ここはかつて、国の中枢と直接結びついていた村です。ですから、歴史的に、さまざまなことを吸収する能力があり、高い文化レベルにあるのです」

望ましい展開のもうひとつの兆候は、大森町でベビー・ブームが起きていることだ。去年は5人、今年



Graduation Ceremony of day care center ©Gungendo

は7人もの命が誕生した。実は過去に、大森小学校に誰も生徒がおらず、校舎を維持するため村人が募金を集めたこともあった。廃校になどなれば村が存続できないと誰もが考えていたからだ。今では、孫が最近誕生したばかりの登美と、三浦が共に心配しているのは、いかにして将来の世代に持続可能性の価値観を伝えていくかだ。「私の関心は今、誕生の瞬間から始まる幼児教育です」と登美は言う。一方の三浦は、大森町には保育園の児童が7人、小学校には19人いるが、町の人たちは誰もが子供たちの顔を知っていると言う。「町全体が育てている子供たち、といっても過言ではありません。誰と



Omori-za ©Nakamura Brace

でも自然に挨拶や会話ができる子供たちは、将来、町の外に出ていってもコミュニケーション能力を発揮できるに違いありません。大森町で育ったからこそ、広い視野でものを見られる大人に育ってほしいと期待しています。

新しく大森町に移り住んだ破魔澄子もやはり、ここで暮す人々に新しい世界を広げようとしている。フランス国立管弦楽団のバイオリニストである破魔は、フランス人の夫でフルート奏者のトーマス・プレヴォと数年前にコンサートで大森町を訪れた際、この土地に「一目惚れ」したと言う。二人は現在、フランスでの仕事がない期間は、大森町に住んでいる。昨夏はホルン奏者のエルベ・ジュランと共に、8人の学生を対象に音楽集中セミナーを開催した。最終日のコンサートには、住民が押し寄せ、世界一小さなオペラハウス「大森座」が満員となった。コンサ

トホールとなったのは、かつて銀行だった建物だ。現地の起業家で義肢装具の製造を手がける中村ブレイスの社長である中村俊郎の寄付により、改築されたものだ。

中村もまた、この町に新しい人物を迎えるのに尽力した。ドイツで修行し「マイスター」の資格を取得後に帰国し東京のパン屋で働いていたパン職人の日高晃作だ。今年10月、日高は、妻でやはりドイツ菓子のマイスター資格を持つ直子さんと共に、ドイツパン専門店「ベッカライ・コンディトライ日高」を大森町に開店した。2歳の長男と生まれたばかりの長女がいる2人は、「子供が育つのに理想的な環境」と考え、大森町への移住を決断した。「私たちの夢は、地元で見つけた材料で新しいパンやお菓子を作り出すことです」と日高は言う。

NHKエンタープライズ エグゼクティブ・プロデューサーの井上恭介も、古い銀山跡を「マネー一辺倒」に代わる豊かさをつかもうとする「先進地」として注目した一人だ。たまたま異動先の広島支局から車で2時間の石見銀山を訪れたことが発端となり、この歴史遺産の町で暮らす人々取材した。その様子は、2008年の金融危機リーマン・ショックを契機に日本全国に広がった「新たな価値観による経済」を追求したNHK番組シリーズ「里山資本主義」で紹介された。今回、ユネスコが大森町を取り上げるにあたり、井上が以下の原稿をユネスコに寄せた。

石見銀山の人たちの「里山資本主義」は、ただ町が古風なだけでなく、しなやかだ。山に入ればとり放題の山菜を、春夏秋冬みんなでむしゃむしゃ食べる。果樹の枝を煮出して布を染め、自然のままを強みとした服をつくる。これも原価ほぼゼロ円。お年寄りが田んぼを「もう続けられない」といえば、若者みんなが「代わりに田植えをしよう」となり、秋にコメを収穫したら、そのコメでみんなで餅つきをするのが楽しみだと語りながら、暑い夏も、みんなで田んぼの草引きをする。いわれてみれば、これは「豊か」に違いない。なぜ今まで気づかなかったのか。都会にでなければ豊かになれないなどと言っていたのか。

Contact: Section of Education for Sustainable Development

esd@unesco.org

www.unesco.org/education/esd